

地理的分野の学習 —問題解決評価と地域的差異に関する一考察—

佐々木 智子

児童の学力(理解・態度・能力)の評価と学習指導目標に対する達成の程度の評価を通じて、地域により学力がどのように変化しているかを、特に地理学習を通して考察し又どのようにしたら少しでも向上するかを目的とし、各学校とも5年生の1学期に学習されているはずの問題を中心に、質問紙形式で調査を行った。問題内容は特に農業生産部面を中心にし、漁業問題には全然ふれていなかった事が欠点のように思われたが、漁業面は5年生の教科書に教材としてのついているのも、のつていないのもあり出題をさけた。この点は今後の教科書問題ともからんでくると思う。問題は全部で10問あり、問題の内容は各々(1)生産と云う社会事象を理解するための基礎知識、(2)地域性の把握、(3)地人相関の理法的思考能力、(4)読図能力と云う地理学習に於て中心となるべき4項目を含んでいる。

又調査校選定に当つては、岩手県と青森県の両県にまたがり、県内を4地域に区分してみた。まず都市的な性格の強い所と、町としての性格の強い所、農村、漁村の性格の強い所に分けて見た。この地域選定に当つては、先に地形図と人口数をにらみ合せてそれから生徒の職業構成と合せたものである。

これから述べる地域区分のところで、青都、岩都、青町、岩町、青漁、岩漁、青農、岩農と記されているのは、次のような意味を含んでいる。

青都（青森県の都市）弘前第一大成、浪打小学校

岩都（岩手県の都市）仁王、花巻小学校

青町（青森県の町）蟹田、田名部小学校

岩町（岩手県の町）大原、瀬沢小学校

青漁（青森県の漁村）塩越、板柳小学校

岩漁（岩手県の漁村）安渡、赤浜小学校

青農（青森県の農村）金田、上野小学校

岩農（岩手県の農村）猿沢、西野小学校

小学校の社会科では、1年生では家庭と学校、2年生ではやや遠い地方との関係、3、4年生では町と村、5年生では国、6年生では世界となつている。小学校の社会科においては総合的に地理、歴史、政治、経済学を学習するようになっていっているので、地理的なものを特別に学習させさせると云う事は困難である。従つて地理学習は総合的な学習の中で指導されるべきで、具体的な社会問題を離れて学習すると云う事でない。けれども今回は地理的な問題のみをテストしてみたので、解答に十分な力を発揮できなかつた児童もいたであろう。しかし、全体的な傾向はこれを通して察知する事は可能であろう。次に示す第1表で云える事は、全体的に見て漁村は低く50.08点となつている。これは学習目標があまり理解されていないとみてよからう。でも漁村より農村が一般に理解が高いと云う事は、

第1表 全体の平均点（100点満点）

性別 地域	男 (人)	女 (人)	男 (点)	女 (点)	総合点	両県総合 平均点
岩 農	33	25	55.45	55.16	55.30	56.18
青 農	39	50	58.48	55.44	57.06	
岩 漁	32	31	47.96	51.39	49.67	50.08
青 漁	15	21	52.86	48.12	50.49	
岩 町	38	39	61.97	56.12	59.04	62.84
青 町	41	60	67.29	66.02	66.65	
岩 郡	44	40	64.46	63.20	63.83	66.25
青 郡	54	48	71.38	65.98	68.67	

問題が農業に関してのものが多かったからであろうか。もしそうだとするとやはり地域と関連させた授業が行われて、社会科の中心となる地域性と云うものを上手に利用したにちがいないと思う。

又第1表を見ると、女より男の方がすぐれていると云う事が一目で解る。特に漁村と都市との間の点数の開きは顕著である。漁村に於ては29点という低い点であるのに都市、70点となりその差は41点となつている。これはhigh stepとlow stepの二階層に別れていると判別するのが妥当であろう。今後はlow stepをhigh stepに近づけることが教師の第一の課題でと思われる。最後に社会科教育の目的から考えてみると、

1、児童の地理的特長の一部としての、社会事象に対する基礎知識や理解力は低く、不確実である。

2、自然の諸事象を地理的に思考する能力は割合優れている。

3、児童の学習成績は、良郡（都市・町）と不良郡（漁村）との二つに極端に分れている。

これらの諸問題を解決するには、如何なる方法を用いるべきかは今後の研究課題としたい。